



木曾漆器デザインプロジェクト 担当: 桃園靖子教授

環境デザイン学科2年安藤香葉さん、土井詩絵瑠さん「2014年から長野県の木曾漆器の職人さんと連携して進めています。木曾漆器でアクセサリをデザインし、かわいらしさ、日常生活へなじむように配慮しています。2月には、国際ギフトショーに出品。今後は、ハレの商品としての展開を考えつつ、制作過程を動画などの形で紹介していきたい。」

一般財団法人塩尻・木曾地域地場産業振興センター百瀬友彦さん「自分たちが身につけてみたい漆器をデザインしてごらん、と投げかけて始まった。作り手からすれば、こんなデザインできるか、何だこれは、という

のもあったが、議論しながら新商品を試作開発してきた。ギフトショーに展示して目に触れることで様々な意見をもらい、新商品として開発するサイクルができた。新しい分野での取り組みを行い、今後も長く活動を続けたい」

三重県多気町応援プロジェクト 担当: 志摩園子教授

ビジネスデザイン学科1年清水麻稀さん、岩本真理さん「複数の学科から参加し、夏のインターンシップでお互いの連携を強め、ふるさと納税金額の増額を目標に設定しました。3つのイベントに参加して異なるターゲットに働きかけるなかで、チームで働く力、主体性が身に着きました。最初は他人事だっ

社会・地域とつながる プロジェクトで課題解決に挑戦

昭和女子大学では企業や自治体との連携を通じて学ぶプロジェクト学習に力を入れています。活動を推進する昭和リエゾンセンターによるプロジェクト研究発表会が2月、コスモスホールで開かれ、栄養不足が懸念される若い女性のやせ願望から、少子高齢化で消滅の危機が迫る限界集落まで、多岐にわたる6つの取り組みの成果が発表されました。

た地域活性化を直接自分たちに関わる問題としてとらえるようになり、これからも考え続けていきたい」

多気町農林商工課の松本拓摩さん「学生には生産現場に行き、大変な作業をしてもらった。イベントでは町職員よりも多気町の魅力を来場者に伝えてくれた。何もない町で今後何をしていくべきか、互いの気づきや新しい視点を知ってこれからも一緒に取り組んでいきたい」

食と健康を考えるプロジェクト 担当: 小川睦美教授

健康デザイン学科4年梅木里咲さん、金成優美さん「魚、油、肉、牛乳、野菜など、摂取したい10の食品群の頭文字をとって『さあ、にぎやかにいただく』を覚えてもらおうと取り組みました。インスタグラムで写真投稿を続けたものの、興味をもってもらうのがとても難しく、苦労しました。皆でお弁当を持ち寄って品数を増やすなどの工夫をした結果、サポートした学生の7割が「食生活を見直すようになった」と意識付けはできましたが、「食生活が変化した」のは3割にとどまり、食事による健康への効果が見えにくいという課題が明らかになりました」

味の素広報部鈴木光子さん「厚生労働省からも若い女性のやせが問題と指摘されている。若い女性に何が受けるか、何をどう試せば感じてもらえるか、行動変容というとても難しいテーマに取り組んでもらった。1年で答えがでるものではないので、難しいと知ってもらえれば成果だ。企業には若い女性との接点がなく、貴重な機会だった」

子育てファミリーフェスタ 実施プロジェクト 担当: 石井正子教授、 鶴田麻也美専任講師

初等教育学科1年仁科美里さん、並木楓さん「10年以上続くプロジェクト。当日は台風だったにもかかわらず750人が来場し、空気が効いている学生ホールの開催は好評でした。今年度は新たにキッズEXPOに出向き、直接交渉して協賛企業を新規開拓できました。ボランティア100人の募集、運営も学生で担当して大変でしたが、地域と連携する企画を通じてPDCA体験と能力を身に付けました。反省は、メンバー間の連携不足。to do リストの作成が活用できなかったので、来年度以降はグーグルドライブの活用を提案します」

世田谷区子ども家庭課佐藤秀和さん「世田谷ならではの子育てと一緒に考えていきたい」

戦後史料を後世に伝える プロジェクトー被団協関連文書ー 担当: 松田忍准教授

歴史文化学科3年吉村知華さん「メンバー全員の研究報告から被爆者の戦後の歩みを解明することを研究目的と決め、夏休みに5日間、被団協文書の整理に参加しました。さらに被爆者のお二人へのインタビューを通じて、被害にあった瞬間から被爆者が生まれたのではなく、原爆の被害にあったのは私たちと同じ普通の人たちで、「同じ体験を誰にもさせたくない」と考えることで「被爆者になつた」のだと考えるようになりました。秋桜祭で発表し、武蔵大学での公開ミーティングに参加すると、被爆者の方から反論もありました。近くの方にインタビューをして、批判を受け止めてさらに考えていきます。来年度は一次史料を活用して分析を続けたい」

松田忍准教授「2012年度から整理してきた史料は6257点に上る。果然と立ち尽くして、どこから手を付けて、どうまとめるか、わからない状態から史料を読み込んで、考え、修正する。歴史の作業とは、現代と過去の対話(E・H・カー)。歴史的思考力は他学科の学生も必要で、ぜひ参加してほしい」

魚沼・三軒茶屋 結プロジェクト 担当: 天笠邦一准教授

現代教養学科3年早川光夏さん、高橋映実さん「米どころとして知られる新潟県魚沼市商店街の魚沼職人大学と商品開発しつつ、約110世帯人口60人という福山新田地区を訪ねて、認知度向上とファン増加のためにできることを検討しました。米粒をモチーフにしたオリジナルキャラクター「ゆきっぺ」や観光推進ポスターなどを考案しました。開発した商品は三茶ふれあいマルシェでも販売します」

魚沼市企画政策課五十嵐誠さん「お年寄りがLINEで学生とのやりとりを始めた。地方には全く違う価値観がある。地方の奥深さを知って、また都会で活躍してほしい」

厳しい現実飛び込む勇気と チャレンジをこれからも

プロジェクトごとに苦勞を重ねた成果と課題が報告され、ICTツールも活用しつつ学生たちが幅広い学びを得ていることが伝わりました。金尾朗副学長・リエゾン委員会委員長は「外の厳しい環境に飛び込むという、学生たちに貴重な機会を提供してもらい、協力いただいた方々に感謝している。報告からは勇気ももらった。現実と向かい合っ

行事予定一覧

4月3日(水)



UP SHOWAはこちらから
※掲載以降の日程は、UP SHOWA
お知らせ等で各自確認してください。

- ・学科オリエンテーション(～9日)
- ・図書館オリエンテーション(～9日)
- ・新入生対象英語プレイズメントテスト(9:00)
- ・日本語教育ガイダンス(15:30)
- ・学芸員ガイダンス(15:30)
- ・教職課程履修ガイダンス
(中高・栄養教諭向け/新入生対象)(16:30)
- ・学科主催夕食会(～9日)

4月4日(木)

- ・健康診断(～8日)
- ・副学長・教務部長講話
(五修生1年次対象・10:00)
- ・教務・学生・キャリア支援部長講話(11:00)
- ・留学フェア(12:30)

4月5日(金)

- ・学芸員ガイダンス(13:00)
- ・図書館司書・司書教諭ガイダンス(15:00)
- ・教職課程履修ガイダンス
(中高・栄養教諭向け/新入生対象)(16:30)

4月6日(土)

- ・留学フェア(11:30)

4月8日(月)

- ・eラーニング説明会

4月10日(水)

- ・前期授業開始
- ・インターンシップ説明会(17:00)

大学の魅力を発信する学生記者募集中!

昭和女子大学のウェブサイトで見ることができる、歴史ある大学新聞「昭和学報」。一緒に昭和女子大学の魅力を発信しませんか?企画から取材、記事の執筆が主な活動です。書くことが好きな人、初めての人でも大歓迎です。gakuho@swu.ac.jpまたは右の応募フォームにて通年受け付け中です。



第628号 2019年4月1日

昭和女子大学

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7-57
編集発行人 学校法人昭和女子大学広報部

昭和学報

S H O W A G A K U H O

INDEX

- グローバル 昭和ポストン30周年 ③
- 在学生から 活躍する在学生達 ④
- 視野を広げる 社会人メンター制度 ⑥
- 卒業生訪問 世の光となろう ⑦
- キャンパスライフ プロジェクト学習 ⑧

昭和女子大の新しいステージへ

理事長
総長

坂東 真理子

Mariko Bando



2019年度昭和女子大学は新しいステージに踏み出します。夏にはペンシルベニア州立テンブル大学日本校(TUJ)が西キャンパスに移転してきます。アメリカをはじめ多様な国籍の1500人の学生・大学院生と教職員が昭和女子大学の図書館、体育施設、キャンパスをシェアします。これは日本で初めての試みであり、両大学にとってのチャレンジであるばかりでなく、日本の高等教育の在り方にも大きな刺激を与えるプロジェクトです。

新しいスーパーグローバルキャンパスにおいて、ダブルディグリー・プログラム、科目等履修をする学生だけでなく、学生たちがクラブ活動やいろいろなレベルの活動を共にし、刺激を受ける中で創造的な動きが生まれると期待しています。また昭和女子大学の教員の講義・演習をTUJの学生が履修する、教員同士が共同して新しいプログラムを立ち上げる、職員同士が組織運営の在り方、教育の在り方に対して刺激を与えあう、という

動きも始まっています。触れ合う機会が増えればお互いの習慣や価値観がぶつかることもあるでしょう。しかしそうした多様な環境の中で自分のアイデンティティをしっかりと確立する経験はこれからの地球社会を生きる学生たちにとって得難い体験になります。昭和女子大学はキャリア教育、グローバル教育に力を入れています。グローバル教育はTUJとの連携だけでなく、いろいろなレベルで進んでいます。創設30年以上となるポストンキャンパスへは全員留学する国際系の3学科以外の留学生も増えています。昨年初めて10人がダブルディグリーを取得した上海交通大学、今年初めて卒業生が出るソウル女子大学に続きTUJとのダブルディグリーを取得するプログラムも始ま

ります。これ以外の協定校も年々増えて世界中で41に広がっています。

昭和女子大学は8年連続女子大で全国1の就職率を誇っていますがその基盤には、キャリア教育、社会人メンター制度、プロジェクト活動などの様々な取り組みがあります。この成果は全員参加の学業研修、人見記念講堂における女性教養講座、文化研究講座で豊かな人間性を育てている日常の取り組みの賜物です。知識を持っているだけ、言われたことを言われたとおりにするだけでなく、自分で考え行動できる、他者と共感し支える力を持つ女性がこれからの社会で必要

とされています。

21世紀、新しい時代においても昭和女子大学は日本の社会と世界に貢献できる力を持つ女性を育て続け、ほかの大学が手を付けていない新しい取り組みをしています。

常に希望を語れる人に

学長

金子 朝子

Tomoko Kaneko

「平成」から新しい元号に移る2019年、本学は創立99周年を迎えました。建学の精神「世の光となろう」には、世のため人のために進んで自分の力を役立てようとする女性を育て、女性の力で新たな世界を築かなければならない、という思いが込められています。今年

の9月には、アメリカのペンシルベニア州立テンブル大学日本校(TUJ)が本学西キャンパスに移転し、日本の大学で初のスーパーグローバルキャンパスが誕生するなど、2020年の創立100周年、そしてその後に向けての本学のグローバル化はさらに加速しています。

解決が難しい課題に溢れたこれからの社会で活躍するには、ゼロからのを生み出す創造力、他者と協力して課題を遂行する協働力、たとえ失敗しても粘り強く前進するチャレンジ力が必要です。先輩たちが積極的にやっているさまざまなプロジェクト活動は、これからの時代に必要そうした力を身に着けるために、絶好の機会を与えてくれます。

また、本学で3年、海外の大学で2年学び、両方の大学の学位を取得できるダブルディグリー・プログラムも、中国の上海交通大学、韓国のソウル女子大学、TUJなど、海外提携大学を増やしています。日本や世界を舞台にグローバル



に活躍できる女性リーダーが育っています。各学部・学科では、社会に貢献し学び続ける女性の育成を目指して、入学された皆さんの4年間の学びのガイドとなるように、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、そしてキャリアデザイン・ポリシーを定めています。「何をなぜ学ぶのか」「どう学びどう生きるのか」を考えていくためのガイドとして、パー

ソナルポートフォリオともなる「DREAM手帳」と共に、是非活用してください。

さあ、これからの新しい社会の発展をリードしていくことになる新入生の皆さん、大学生としての第一歩の始まりです。大きな夢に向かって、常に希望を語れる人、難しい課題にも賢く逞しく立ち向かえる人として、一歩一歩前進を続けてくださることを期待しています。

SHOWA CAMPUS PICK UP

9月から米テンブル大学日本校と 日本初の日米大学統合キャンパスに

2019年9月、キャンパス西側に建設中の6階建て新校舎に、米ペンシルベニア州立テンブル大学日本校(ブルース・ストロナク学長、以下TUJ)が移転し、日本初の日米大学統合キャンパスとなる。TUJには60か国以上の国や地域の学生が在籍し、スポーツ施設やカフェテリア、講堂などを共同で利用、キャンパスのグローバル化が実現する。

TUJは現在日本に立地する唯一の米国の4年制州立大学で、本校と同じカリキュラムで授業を行っている。両大学は2016年に単位互換協定を結んだが、移動に時間がかかり相互に履修しにくかった。今後は両大学の学位を取得するダブルディグリー・プログラムや、学生活動などを通じて日常的に交流しやすくなる。

昨秋には、全国の大学に参加を呼び掛けて「日米アカデミックフォーラム」を共

催するなど、両大学で日本の大学教育の質の向上を目指していく。昭和女子大学で開催した講演会「米系エアラインの女性機長、女性リーダーと考えるグローバルキャリア」にTUJの学生が来校し、TUJで開催された国連UNHCR難民映画祭に本学から参加するなどの交流が始まっている。





昭和女子大学
ご入学おめでとうございます

～学科長から新入生に贈ることば～

抽象的に考え具体的に発言しよう

みなさんは小学校での読み・書き・算術からはじまり、中学・高校でも、いろいろと学んできました。いままでの知識が礎として具体的に即していたとするなら、大学の専門的知識は抽象的思考の修練をととして身につきます。



国際学科長
李 守

英語を学び、世界を広げる

大量の情報が流通する現代において、情報の入手経路を複数持つことは物事を深く理解するのに不可欠です。英語という大量の情報を運ぶことばを学び、コミュニケーションについて考え、自分の世界を広げていく学生生活にしてください。



英語コミュニケーション学科長
小西 卓三

ビジネスの最先端を切り開く

ビジネスデザイン学科では、新たな価値を創造するための経済経営の知識、グローバル市場に対応するための高い英語力、自律した個としてビジネスの最先端を切り開くための問題解決能力を養います。自分で考え行動し発信する、凛としたビジネスウーマンを目指し、日々の学びを確実なものにしていきましょう。



ビジネスデザイン学科長
今井 章子

素直な心で根気よく

会計ファイナンス学科は今まで女子大にはなかった学科です。女性の社会進出が期待される中、ビジネスにおいても家計においてもお金の流れを把握し、有効に活用していくことは大変重要です。理論と実践との架け橋となるような教育を行います。素直な心で根気よく学びましょう。



会計ファイナンス学科長
山田 隆

さまざまな出会いを楽しむ

このキャンパスの中で、たくさんの人との出会い、本との出会い、あるいはモノ、コトとの出会いに臆することなく向き合い、楽しんでください。それがこれから始まるあなたの学生生活に彩りを添え、支えになっていくと思います。



日本語日本文学科長
山本 晶子

新しい自分を発見しよう!

この4年間は皆さんのその先の人生にとって、大きな意味を持つはず。計画的に学び、活動してもらいたいと思います。大学生活では、勇気を出して新しいことにチャレンジすること、明確な目標を持ち努力することをお勧めします。4年後、誇れる自分になれるように、さあ、がんばって!



歴史文化学科長
大谷津 早苗

自分の可能性を広げよう

心理学者エリクソンは、社会に出るための猶予期間であるとして、青年期を「モラトリアム」と呼びます。大学生活は、様々なことに挑戦し自分の可能性を広げる機会に満ちています。いろいろな経験をすること...そこから新しい自分が見つかります。応援しています。



心理学学科長
田中 奈緒子

実践を通して学びを深めよう

福祉社会学科では、地域での実践を通じた学習機会が多く設けられており、各自のキャリアデザインに応じて多角的に学ぶことができます。社会福祉の専門的スキルを身につけ、社会問題の解決に貢献できる人材となることを一緒に目指しましょう。



福祉社会学科長
根本 治代

心の支えとなる言葉を

学生時代には沢山の読書により貴女の心の支えとなる言葉を見つけて下さい。
“The good life is one inspired by love and guided by knowledge” (Bertrand Arthur William Russell)にある“guided by knowledge”は、研究遂行の力になっています。



現代教養学科長
瀬沼 頼子

新しい学びの共同体へようこそ

2019年度は初等教育学科のカリキュラムも改正され、教育の新時代に向けてリスタートの年となります。新しい学習方法や環境について、また未来の教育や保育について、これから皆さんと共に学び考えていくことを、私たち教員も心から楽しみにしています。



初等教育学科長
永岡 都

自立した学生生活を!

希望するキャリアが実現するよう、デザインの基礎をしっかり身に付けつつ、それぞれの目指す専門性を深めていってください。社会に広く視野を持ち、自立した学生として積極的に前に進もうとするならば、きっと多くの実りを得ることでしょう。応援しています!



環境デザイン学科長
石垣 理子

健康に留意して充実した4年間に

多くの方にとって大学は最後に通う「学校」になります。純粋に知的好奇心に基づいて様々なことを学ぶこの貴重な4年間を、健康に留意して充実したものにしてください。



健康デザイン学科長
山中 健太郎

自ら学び、自ら考え、自ら実践する

期待に胸膨らむ学生生活のスタートです。自分の目標を追求し、無限の可能性に向かって、勇気と実践力を持って、何事にも取り組みましょう。基礎から専門までの知識を修得し、先生方や友人と、大いに語り合い、楽しみ、自分の夢の実現に向けて、日々前進してください。



管理栄養学科長
横塚 昌子

幅広い興味で自分磨きを

人にとって常々変わらない営みは食べる事。食べる事は生きる事。食べる際に、味や栄養、見た目美しさ、食卓の雰囲気等は大切な要素ではありますが、それ以前に大切な事は食の安全です。食の安全をベースに、実社会で活躍するべく、幅広い分野に興味をもち自分磨きをして下さい。



食安全マネジメント学科長
曾田 功



昭和ボストン30周年 1万3000人が”世界”へ羽ばたく

本学の米国キャンパス「昭和ボストン」が昨年、開学30周年を迎えました
日本の大学初の海外における正式な教育機関として
これまでに1万3000人を超える学生が世界へと羽ばたいています



世界的な学園都市に 広大なキャンパス

ボストンは、ハーバード大学をはじめ多くの大学が集まる世界的な学園都市です。昭和ボストンは16万6000平方メートルの広大

な敷地に、寮、教室、茶室、テニスコートなどがゆったりと点在しています。

授業は少人数クラスで、資格を有する経験豊富な現地アメリカ人教員やビジネス等の専門分野の修士を持つプロフェッショナル

が担当し、周辺地域でのボランティア活動も盛んです。

開学当初から、英米文学科(現在の英語コミュニケーション学科)の学生は全員、15週間のボストン留学が必修でした。学科全員に留学を必修とした国内初のケースでした。現在、英語コミュニケーション学科は半年ないし1年間、ビジネスデザイン学科は半年間の留学が必修です。また、国際学科からも数十人が毎年学んでいます。

上記3学科以外の学科の学生は、「春期・秋期15週間ボストンプログラム」(4ページ参照)に参加できます。英語集中講義とアメリカ文化の理解を深める授業や選択科目によって、日本での学びに加えて英語力と専門性を深めることができます。参加者には全員に奨学金500ドルが支給されます。

さらに、学部学科を問わずサマープログラムも充実しています。多彩なフィールドワークが特徴で、歴史文化学科はボストン美術館を訪問したり、食安全マネジメント学科はグ

ローバル企業でフードマネジメント・システムを学んだりしています。

アメリカの同世代の若者と 寝食をともに

昭和ボストンでは、現地の女子学生たちが Resident Assistant(寮監)として寝食をともにします。「アメリカの大学生がどんなことを感じて、考えて、生活しているのかを間近に見られて、本当のアメリカを知ることができました」。世界的な総合コンサルティング会社アクセンチュアでデジタルコンサルティング本部シニア・マネジャーを務める金居幸代さん(1997年英米文学科卒)が、2年次に過ごしたボストン留学を振り返ります。金居さんのように、ボストン留学がグローバルなキャリアに踏み出す原点になった卒業生は少なくありません。

広がる留学の意義

昭和ボストンが開学した1988年当時、日本人留学生は年間1万8000人(OECD調べ)。一方、2016年度に海外へ留学した日本人学生は97,000人に上るとする統計もあり、留学が身近になってきました。

本学も欧米やアジア20か国41大学に協定校を広げ、交換留学制度に加え、両校の単位を同時取得できる「ダブルディグリー・プログラム」を充実させています。昭和ボストンでも、近郊のFramingham State Universityなど協定大学への留学を後押しする「ブリッジ」(架け橋)の機能を強化するべく、カリキュラムの充実を図っています。



Why Study Abroad?



昭和ボストン学長 フランク・シュワルツ
Frank Schwartz

昭和女子大学ご入学おめでとうございます。私の仕事は、昭和のグローバル化に貢献することです。ですから、どの学科であろうと、また2週間の短期であろうと1年間の長期であろうとなぜあなたが学生時代に留学を体験したほうがいいのかということをご説明したいと思います。海外留学をした多くの人が、それは人生を変えるような経験だったとか、これほど有益な経験は他にないなどと言います。どうしてでしょうか。外国に住むことにより、何を学べるのでしょうか。

第七に、留学経験を履歴書に書き加えれば、自身の価値を高めることができます。企業は益々、異文化能力を備えた社員を求めています。

第八に、今日のように世界中の国々の関係が緊密な世界では、私たちは皆、グローバル市民として行動する必要があります。個人として成功し、同時に世界中の人間に対して責任を全うするためには、異文化の人たちと交流する能力や、グローバルな視点から様々な問題を分析する能力を身につけなければなりません。

第五に、ボストンでは、新しい視点から学習します。そしてボストンでは全く異なるスタイルの教育を受けることができます。その経験は東京へ戻った後で役に立ちます。ある研究によると、留学経験のある大学生は、そうでない場合に比べて成績がよく、卒業率も高いということです。

第六に、日本で授業を受けているだけでは決して得ることのできない技能や能力を海外生活によって身に付けることが可能です。異なる社会に住んでいると、これまで全く知らなかった課題や難問に出くわすことがあります。それらに対応できるようになるのです。

第四に、留学をすることにより、貴重な人間関係を築くことができます。新たに知り合った人たちと交流したり新しい考え方を学んだりできます。このように実りある友人関係を広げることに加え、これらの友人は将来の人的ネットワークとしても大切です。

そして最後に、海外生活をすると好奇心や状況対応能力が増し、物事に対する情熱も高まります。そうしてあなたは成長するのです。現実社会の様々な問題について、自分自身や日本について、新たな興味が生まれ、新しい見方をすることもできるようになります。



【在学生に聞く】 昭和女子大学と中国・上海交通大学の両大学を同時に卒業

昭和女子大学国際学部は海外留学が必修。米国・昭和ポストンを拠点に、様々な国や地域の海外協定校と交換留学プログラムを実践しています。なかでもユニークなのが、ダブルディグリー・プログラム。中国の名門校・上海交通大学や韓国の伝統校・ソウル女子大学とで学び(本学3年間・協定大学2年間)、5年間で留学先と本学の両方の学位が取得できる制度です。中国でのプログラムを修了して帰国した国際学科・加賀見依里さんに学報委員が話を聞きました。

——ダブルディグリーをどう思ったきっかけは何ですか？



インタビュー時、加賀見さんは22歳で大学5年生。ダブルディグリープログラムの2期生になる。附属校の高校3年生から大学で学べる五修生制度を利用して、上海交通大学で2年間、昭和女子大学に3年間通って今春両大学の学位を修得する。総合物流会社に内定。

英語よりも第二外国語である中国語を学びたいと思っていました。なぜ中国語なのかというと、中国の人口が多いから。留学するなら2年間かけて、言語のみではなく文化も深く学びたいと考えたからです。

——上海交通大学ではどのような勉強をしたのですか？

グループワークが中心でした。特に韓国人が多かったのですが、世界各国から留学生が集まっていたので、様々な文化に触れることが出来ました。最初はついていけなかった中国語も、3か月経つとわかるようになっていきました。

——中国語はどのように習得したのでしょうか？

もともと中国語は全く話せませんでした。留学するためにはHSK(中国語検定)4級以上の習得が必須でした。そのため、昭和女子大学での最初の1年半は、中国語の勉強に費やしました。自分の時間を削って毎日中国語を勉強し、留学に備えました。留学してから、寮や学校の友人と積極的に中国語で話したことが、中国語の上達に繋がったと思います。

——苦労した点はありますか？

言葉の壁です。必死に自分の意見を言おうとしても、理解されず聞いてもらえないこともあり、もどかしい思いでした。でも、その中で、自分の弱点をみつけることもでき、それが自分の成長へと繋がりました。また、帰国後の就職活動では、まだダブルディグリーが認知されていないので、もっと知ってもらいたいと思いました。



——ダブルディグリーの魅力を教えてください。

留学に2年間行けることです。1年目では気づくことの出来なかったことに、2年目でも気づくこともあります。中国語が上達することもあって、中国のことをより好きになりました。また、2つの学位がとれることは魅力です。様々な苦労をしたからこそ、この上ない経験になり、2つの学位を持っていることが自分の強みにもなると思います。

(インタビューを終えた学報委員から)

今まであまり知らなかったダブルディグリーの魅力を深く知ることが出来た。異国の地で2年間の留学を経験し、本学との学位を合わせて2つの学位を取得できるということは、将来の可能性も広げることができるといった。ぜひ、これから入学してくる学生や、在校生にもダブルディグリーのことを深く知ってもらい、多くの学生が世界に羽ばたききっかけとして、ダブルディグリー制度を利用してほしいと思う。

またこのような経験を積んだ加賀見さんは、とても輝いていてかっこよかった。それは普通の大学生が経験できないことをしたという自信から生じるものだと思う。私たちも加賀見さんのように素敵な女性になるために、これから参加する留学を有意義なものにしたいと思う。

昭和ポストン留学が必須ではない学科向けに、15週間の留学制度「春期・秋期15週間ポストンプログラム」があります。生活科学部健康デザイン学科で大学4年9月～1月の4か月間、ポストン留学を体験した加賀見紀子さんに話を聞きました。

大学3年のとき外資系企業でインターンを経験した際、思っていることがうまく相手に伝えられず、とても悔しい思いをしました。相手を理解し、自分が考えていることを英語で伝えたいと留学を決断しました。15週間と限られていたので、「食文化についての知識を届けたい」という目的意識を持って臨みました。

最初に、授業外で専攻分野の活動をサポートしてくれるメンターの紹介で、ポス

健康デザイン学科から”昭和ポストン”留学に挑戦、アメリカの「食」を現地で学ぶ

かという興味深い考察を得ることができました。

また、ボランティア活動にも参加しました。患者の病状に合わせた食事を作って配達したり、低所得者に安価で提供する品目別仕分けをしたり。活動を通して世界の格差について学び、自らの目で見て平等とは何か、何が求められているかを考えました。世界の人々が収入や環境に関わらず、健康でいられるようにしたいと、将来の大きな目標を持つことができました。英語を習得するだけではなく、専攻である食と関連した体験や学びを得、とても充実した15週間となりました。

トンにあるロシアやトルコ、中東やアジアなど世界各地の食品を扱うスーパーを巡り、各国の食文化を学びました。

その後、「アメリカ人にとって日本のお菓子の甘さは十分ではない」という仮説のもと、日本から持参した8種類のお菓子で現地の方に試食アンケート調査を行いました。味や見た目、包装、大きさ、甘さを評価してもらい、食品の購入ポイント等をたずねました。現地の方にとっても、日本のお菓子の甘さは満足できるものであることが判りました。アメリカでは肥満や糖尿病等の疾患が社会的に深刻な問題となっています。この結果から、アメリカのお菓子類の甘さは必要以上であり、肥満、糖尿病等の予防、解決策につながるのではない



附属昭和中学校2年で昭和ポストン、同高校2年のときイギリスに短期留学した。中高6年間の教育課程を5年間で修了する五修生で、1年早く「食と美と運動」を学ぶため昭和女子大学健康デザイン学科へ、卒業後は、大手食品会社で研究開発職として就職する。

日中韓の相互理解のため「Asian Women's Leadership Program」開催

昭和女子大学は2018年8月24日まで、誠信女子大学(韓国・ソウル)、上海外国語大学(中国・上海)と3大学共同で「Asian Women's Leadership Program」を開催しました。

各大学から選ばれた女子大生10人ずつ計30人が、1週間ずつ計3週間をかけて互いの国を訪問し、講義を受けて学びを深め合いました。英語でのディスカッションやグループワーク、プレゼンテーション発表などの活動を通じて、女性が国際社会で活躍するために必要なリーダーシップを身に着けることを目指しています。

化粧品市場は、漢方薬の歴史から成分へのこだわりが強い中国、機能重視の日本、イメージ戦略の韓国と、特徴が浮き彫りになりました。トランスジェンダーでは、日本の許容度が高いのに対し、中国は厳しく、韓国ではフェミニストとの論争など、3国の温度差が明らかになりました。

一方、ハリウッド映画では共通してアジアの誇張表現が目立つこと、欧米に比べて入れ墨への拒絶反応が強いことなど、3国の共通点も明らかになりました。機械翻訳時代の外国語学習の必要性など、異文化理解の重要性を感じさせる発表でした。

最終プレゼンテーションは、各大学2人ずつ6人のチームに分かれて競いました。選んだテーマは「化粧品市場の日中韓比較」「日中韓におけるトランスジェンダーの現状」「機械翻訳時代における外国語学習は必要か」「ハリウッド映画における東アジア文化の固定概念」「入れ墨に対する社会的受容度」と、ユニークな内容が並びました。

化粧品市場は、漢方薬の歴史から成分へのこだわりが強い中国、機能重視の日本、イメージ戦略の韓国と、特徴が浮き彫りになりました。トランスジェンダーでは、日本の許容度が高いのに対し、中国は厳しく、韓国ではフェミニストとの論争など、3国の温度差が明らかになりました。

一方、ハリウッド映画では共通してアジアの誇張表現が目立つこと、欧米に比べて入れ墨への拒絶反応が強いことなど、3国の共通点も明らかになりました。機械翻訳時代の外国語学習の必要性など、異文化理解の重要性を感じさせる発表でした。

「家事ミッション ママ・パパを救え!」リーダーズアカデミー発

昭和女子大学には、学部学科横断でリーダーシップを養うための特別プログラム「リーダーズアカデミー」があります。毎年共通テーマが選定され、複数のチームに分かれて、それぞれに課題解決を目指しています。その中で、女性に偏っている家事負担を解消して女性の社会進出を促そうと目指す「家事改革」チームが2018年12月19日、子どもたちが家事を楽しく分担するためのワークショップ「家事ミッション ママ・パパを救え!」を小学1・2年生を対象に開催しました。

自ら課題を見つけて解決策を創造するリーダーズアカデミー

リーダーズアカデミーは、坂東真理子理事長・総長の発案で次世代を担うリーダーとなる人材を育てようと2012年にスタートしました。毎年、全学科から選抜された2・3年生が参加し、1年間かけて著名人や実務家による講義を受け、7～8人ずつのチームに分かれて共通テーマのもと、現代ビジネス研究所研究員のファシリテーターから社会人の視点のアドバイスを受けながら、自ら課題を設定し、解決方法を考案します。



2018年度は計32人が参加、共通テーマ「女性は未来を創る」のもとで4チームに分かれ、それぞれ「家事改革」「避妊所」「女性の自己肯定感」「リーダーシップ」を課題として設定し、解決策と取り組みました。

子どもたちの「楽しい家事」で女性の社会進出の壁を取り除く

ワークショップ「家事ミッション ママ・パパを救え!」は、「家事」をキーワードに取り組み「家事改革」チームが学内で主催し、昭



和女子大学附属昭和小学校のアフタースクールに通う1・2年生男子4人、女子18人が参加しました。

日本では女性の社会進出を阻む要因として、家事負担が女性に著しく偏り、男性がほとんど家事を負担しないことが挙げられています。そこでチームでは「働き方改革」ならぬ「家事改革」を目指しました。

家事改革の柱として、子どもが家事を分担すれば、母親の負担が減ると同時に、子どもが社会人になった時に家事を分担しやすくなると考えました。ただし、家事を教えるのではなく、子どもが家事を楽しく身に付けられるようにと企画したのがワークショップでした。

小学生は男女入り混じって制服のハンガーかけや洗濯ものをたたむ「家事ミッション」に挑戦しました。さらに「なぜ、ハンガーに制服をかけないといけないのか」「なぜ、服をたたまないといけないのか」、子

どもたちに理由も考えてもらいます。

ミッションをクリアすると「ミッションカード」にスタンプがもらえる仕組みで、小学生たちは「家に帰ってもやりたい!」と楽しんでいました。

明らかになった「幼少期の家事経験」と「家事の心的負担」の相関関係

チームでは、社会人男女を対象にアンケートを行い、性別にかかわらず家事を「負担に思う」「あまり負担に感じない」に分かれ、後者は「子どもの頃から家事を手伝っていた」という共通点があることを突き止めました。幼少期から家事を担っていた人は、習慣として家事が身につけたり、自然とコツをつかんでいたりするのに対し、「家事のやり方がそもそもわからない」人が家事を負担に感じているケースが目立ちました。

学科横断で、多様な学生がそれぞれの得意分野を生かし合った成果でした。

「ソーシャルビジネスで世界を変える」ビジネスコンテストを主催

昭和女子大学で2018年、世界的な社会起業活動Hult Prizeの学内予選大会が初めて開かれました。運営委員会代表の田中香穂さんの報告です。

Hult Prizeとの出会い

始まりは1通の「Hult Prizeの活動を昭和女子大学でも始めてみないか」というMessengerでした。最初は怪しく思いましたが、話を聞くうちに、自分が「世界を変える一歩」を作り出す側になれるのではないかと興味を持ちました。

私には「壁のない社会を作る」という志があります。紛争や貧困などの問題を、どこか遠くの国で起きているものだと思うのではなく、地球全体をひとつの国として捉え、世界全体で考えて解決していきたい。今回、この活動を通じて、より多くの学生に国際社会問題について考えるきっかけや、それによって生まれたアイデアを発表する場を提供することができ、世界にわずかにでもよいインパクトを与えることにつながると思いました。

【優勝したDream seedの声】

「今回のコンテストをきっかけにソーシャルビジネスについて学ぶことができ、非常に貴重な経験でした。授業でも社会起業に関して学びますが、Hult Prizeに参加したことで、世界的な社会問題を自分ごととして捉えることができるようになりました。

ビジネスをゼロから立案するのは想像以上に難しかったです。特に、アイデアはでもそこから収益をどうあげるか?などビジネスとして成立させるのがとても難しかったです。チームで何度も何度も考えては白紙に戻す、を繰り返すのは大変で、諦めたくもなかったけれど頑張ったので、次海外地域予選大会では他国・他大学のアイデアを聞き、学び、交流できるのを楽しみにしています」

学内予選大会とは

今回のテーマは「Youth Unemployment」。10年間で1万人の若者に意味のある雇用を生み出すアイデアの創出を、1チーム3～4人、発表10分間、使用言語は英語、出場チームの熱意やアイデアの社会的インパクトの大きさの評価を競います。

Hult Prize(ハルト・プライズ)とは…世界150か国、1000大学、学生10万人以上が参加している社会起業活動(後援:ビルクリントン財団)。学生のアイデアによる国際課題の解決を目指す。学内予選大会で優勝したチームは海外地域予選大会に進出。さらに世界大会で優勝したチームは、起業資金1億円をもらい、アイデアを事業化する。

13チームがアイデアを競う

計13チームが出場し、プレゼンテーション、審査員4人による質疑応答、審議が行われました。どのチームも自信を持ったプレゼンテーションを作り込んできて、いざいざハイレベルな発表でした。出場者それぞれが今まで積んできた経験・体験や、そこで得た気づきや感情などを大切にしながら、話を聞くうちに、自分が「世界を変える一歩」を作り出す側になれるのではないかと興味を持ちました。

審査員の方々も、出場チームの想いを尊重した意見や指導など、1チーム1チームと真剣に向き合ってくださり、出場者にとっても励みになったと思います。

「今回のコンテストをきっかけにソーシャルビジネスについて学ぶことができ、非常に貴重な経験でした。授業でも社会起業に関して学びますが、Hult Prizeに参加したことで、世界的な社会問題を自分ごととして捉えることができるようになりました。

ビジネスをゼロから立案するのは想像以上に難しかったです。特に、アイデアはでもそこから収益をどうあげるか?などビジネスとして成立させるのがとても難しかったです。チームで何度も何度も考えては白紙に戻す、を繰り返すのは大変で、諦めたくもなかったけれど頑張ったので、次海外地域予選大会では他国・他大学のアイデアを聞き、学び、交流できるのを楽しみにしています」



社会で活躍する女性と対話する 「メンターフェア」が 2018年で100回に

実就職率8年連続女子大1位*を達成している昭和女子大学では、特色あるキャリア支援を行っています。その柱の一つ、様々な職業やライフスタイルの「社会人メンター」を囲んで、学内で学生たちが自由に話を聞ける「メンターフェア」が2018年10月22日で100回を迎えました。

*2018年3月卒の実就職率96.7%。卒業生数1,000人以上の全国の国公私立大学中5位、8年連続で女子大トップとなっています。(大学通信調べ)



「学生と話す初心に戻れる」と語るメンター 荒木直美さん

人生の先輩「メンター」は300人

「社会人メンター」は、学生にとって親でも先生でもない人生の先輩となる相談役の女性です。本学の卒業生に限らず、20代から70代まで幅広い世代の、多様なキャリアを持つ女性約300人がメンターとして登録しています。

メンターの職業は幅広く、教員や警察官、都道府県や国で活躍する公務員をはじめ、客室乗務員やアナウンサー、社会福祉士や建築士といった専門職から、編集者や脚本家などクリエイティブな職業、さらに貿易や通訳などといったグローバルな各分野で活躍している仕事など多彩です。

さらに、子育てと仕事を両立させている人や、海外勤務経験がある人などライフスタイルも多岐にわたります。

「メンターフェア」はメンターと”気軽に”話せる場

学生ホールで行われる「メンターフェア」には8～12名のメンターが参加し、学生は出入り自由でメンターと交流できます。ひとりのメンターを複数の学生が囲み、自由に質問します。業種やライフスタイルの異なる複数のメンターと話することで、キャリアや生き方について様々な選択肢を知ることができます。年の離れた社会人と話すのは、学生にとっては緊張しがちですが、「メンターフェア」では、友人たちと一緒に気軽に話せることが大きな特徴です。

第100回目のメンターフェアに66人の学生が参加しました。建築士やフードデザイナー、NPO団体職員や公務員など幅広い職業のメンターが自身の体験を学生に語りました。

採用やマーケティングの支援を個人事業主として行う荒木直美さんは、メンター2期生として、2011年秋から数多くの学生たちと向き合ってきました。現在は、保育園などを運営する企業の採用支援や、留学生や地方創生に関する新規事業の支援などを行うかたわら、小学生・中学生の母親として地域の活動などにも積極的に参加しています。

荒木さんは日ごろ採用に関わる仕事をしていることもあり、女性の働き方に関連する新しい試みに興味を持ち、メンターに応募したそうです。「若い学生さんと話すことは自

分にとって活力となり、初心に戻るきっかけとなります。6年間で学生の雰囲気も変わりましたね。今の学生さんの方が、キャリアに対する意識が高まっていると感じます」と話しています。

さらにメンターフェアなどの場でメンター同士で交流することもあり、さまざまな業種のメンターと関わることで視野が広がるそうです。

「学生のキャリア設計に関わることができて嬉しい」と笑顔で語ってくれました。また、英語コミュニケーション学科の授業内でゲストスピーカーとして話すなど、メンターとしての活躍の幅を広げています。

さまざまなイベント実施中 メンター募集は年2回

メンターと学生の交流方法には、今回紹介した「メンターフェア」のほか、テーマを設けて4人のメンターのプレゼンテーションを基に交流できる「メンターカフェ」や、会いたいメンターと1対1で話せる「個別メンタリング」があります。知りたいこと、関心、テーマに応じて3通りのプログラムを活用して、社会を知り、生き方を考えることができます。メンターは毎年春と秋に募集しています。



メンターフェア開催中

会計ファイナンス学科1期生 簿記3級 合格率約9割

2018年度に開設した会計ファイナンス学科1期生は、入学後7か月弱で約9割の学生が日商簿記3級を取得するという快挙を達成しました。東京商工会議所が集計する全体の平均合格率を大きく上回っています。短期間でどうして高い合格率を出せたのでしょうか？

簿記とは企業のお金の流れを正確に記録するためのスキル。この力が身につけば、資金の流れや経営状況を客観的に理解できるようになります。例えば簿記の基礎知識を基に、融資の際に企業価値を適切に評価できるなど、さまざまな可能性が広がります。

会計ファイナンス学科は、「学生全員が簿記合格」を目標にしているのが大きな特長です。

入学直後に全員が「簿記初級」を受検するので、入学前から簿記初級合格を目指した勉強をスタートさせます。合格発表から大学入学までの間、中だるみせず大学受験勉強の習慣を維持したままス



タートさせます。

また、本学の特長である年1回3泊4日の学業研修時には、全員で集中講義に取り組み、任意参加の勉強会も実施します。仲間と一緒に、だからみんながんばれます。

会計ファイナンス学科の教授室は明るい雰囲気の大部屋で、わからない問題があれば、いつでも気軽に訪ねて質問できます。学科では企業・地域との協働プロジェクトにも積極的に取り組んでいます。

山田隆学科長は「ここでコミュニケーション力や交渉力をしっかり活動で身につけていく」と語ります。1・2年生で簿記合格を通じて「やるべき時にコツコツ勉強し、基礎をしっかりと身につけることを重視しています。3年生以降、ゼミやプロジェクト活動を通じてより実践的な学びを積みま

保育士採用試験も 高い合格率—初等教育学科

2018年12月5日時点での初等教育学科幼児教育コース4年生の公務員(保育士)試験の合格率は95.8%の23人(補欠3人を含む)です。主な自治体は、渋谷区、品川区、世田谷区、杉並区、横浜市、千葉市、埼玉県さいたま市など。最終合格率は2年連続で95%を超えています。

また、12月5日時点での私立幼稚園の合格者は10人で、受験者全員が合格しました。来年度からそれぞれ大いに活躍してくれることでしょう。

管理栄養学科—管理栄養士 国家試験合格率98.7%を達成

2018年3月の管理栄養学科卒業生78人中77人が管理栄養士国家試験を受験し、76人が合格しました。合格率は98.7%と、毎年高い受験率と合格率を維持しています。

正規講座だけで実力を伸ばせる仕組みが整っています。1年次に基礎を学び、段階を追って専門知識を習得します。3年次後期から徐々に国試対策にシフト。4年次には必修の受験対策講座が始まり

初等教育学科では、「保育・幼児教育指導室」で、元園長や現場経験が豊富な先生方から、公務員(保育士)試験、教員採用試験(幼稚園)の受験指導を含む、専門的できめ細やかな指導を受けることができます。

また、キャンパス内のこども園や近隣のナースリー、その他のプログラムでの乳幼児との触れ合いを通して、専門性を高めていくことができます。

ます。国試模試を受験し、自己採点后に足りない分野を翌週に自習。これを繰り返して試験のコツをつかみます。後期からは本番に向けてラストスパート。合格点に満たない学生は翌週から模試の再受験・再々受験が課されます。模試受験は最低でも10回。夏季休暇と試験直前の春季休暇には「国試合宿」が組まれており、模試で合格基準を満たせるまで特訓します。

[昭和女子大学を卒業後、一歩踏み出して行動し続ける女性を紹介するシリーズ]

アメリカで乳癌治療の ガイドライン作りに奔走する研究者

生活科学部管理栄養学科1994年卒業、同大学院で修士。静岡県立大学大学院で博士号取得後、米国立衛生研究所(NIH) 研究員。メリーランド大学、テキサス大学などを経て、2013年よりオクラホマ大学医学部病理学部スティーブンソン癌センター准教授



田中竹美博士

今、アメリカで乳癌の治療ガイドライン作りに取り組んでいます。国民皆保険制度が整っている日本では、乳癌と診断されればすぐに手術するのではないのでしょうか。ところが、アメリカでは30%が2か月以内に手術を受けられません。何万人もの患者データベースから、手術の遅れは貧困層だけでなく富裕層にも見られることがわかりました。セカンドオピニオンを求めたり、高名な医師の手術を待ったり。一人一人加入している医療保険が異なり、保険の認定に時間がかかります。アメリカの保険制度が少しでも変わって

くれれば、何かの役に立つことが、研究の意義だと思っています。昭和女子大学に入学したのは「勘」です。受験で学校を見学して「ここに入るだろうな」と感じました(笑)。でも、研究者になるなんて想像もしていませんでした。「資格をとっておけば何かの役に立つだろう」と管理栄養学科を選びました。大学を卒業するだけで資格がとれた最後の世代です。初めて顕微鏡で微生物を見たときに、すごく楽しくて、考える習慣は大学で身に付けました。学生時代は実験で失敗することばかり。でも、飯野久和先生は失敗した理由を教えるのではなく、なぜ失敗したのか、砕いて、砕いて、考えることを習慣にするように導いてくれました。研究の基礎を身に付けられたことに感謝しています。

大学時代は無心に自分のために勉強ができる、とても贅沢な最後の時間です。皆さんには一つでもいいので達成したいテーマを見つけて、集中して取り組んでもらいたいです。

国境を超える映画の力を実感 女優として大好きな映画に懸ける

人間文化学部歴史文化学科2015年卒業 女優
大学1年の2012年、矢崎仁司監督「1+1=1 (イチタスイチハイチイチ)」で初主演
主演した緒方貴田監督「飢えたライオン」(2018年)は世界各地の映画祭で受賞

主演させていただいた「飢えたライオン」は、女子高生がSNSのデマの被害に遭うという現代の社会問題がテーマです。海外の関心も高く、学生時代に留学経験もある韓国で賞をいただいたことは大変嬉しかったです。シドニー映画祭、バレンシア国際映画祭など各国の映画祭の招待を受け、オランダのロッテルダム映画祭では私も学生との討論会に参加しました。若い世代から熱心に質問が相次ぎ、国境を超える映画の力を実感しました。

中学校から昭和女子大附属です。両親とも大の映画好きで小さい頃からよく一緒に映画を観て過ごしました。もともと歴史が好きで、インディージョーンズへの憧れから遺跡を発掘してみたくて歴史文化学科に進みました。卒論は、女優の服飾から映画を観てみたいと、オードリー・ヘップバーンをテーマに選び、書き終えてみれば11万字を超えていました。卒論を書きあげて改めて、自分が本当にやりたいのは映画だと気づきました。

最新の出演作は、若手の女性監督による短編を集めた「21世紀の女の子」です。海外でも女性監督が女性目線で考える映画を制作しています。役者は作品を待たなければなりません。ですが、待っているだけではなく私も将来、作品を企画・制作してかつ演じ、国際的に活躍できる女優を目指しています。

附属校から計10年間過ごした昭和女子大で、ずっと女子に囲まれていたからこそ、女性の生き方を考え続けてきたように思います。映画を通して、女性の生き方を表現していきたいと思っています。



松林うらら

”考え抜いた“大学時代 自分にしかできない建築を目指して

生活科学部環境デザイン学科2010年卒業
千葉大学大学院へ進学後、2016年一級建築士に合格
ジェイアール東日本建築設計事務所 商業設計本部商業2部 主任

昭和女子大学で「設計製図」に熱中しました。与えられたテーマに沿って図面を引き模型を作成してプレゼンするのですが、「心地よい空間」といった抽象的なテーマでした。必死に考えても発表のたびに鋭い指摘を受け、今度はそれに応えて説明し、説得する経験を通してコミュニケーション力が鍛えられました。何よりも同じ志を持った友達と出会い、お互いに成長しあえたことがよかったです。友達とは授業外でも集まりよく議論しました。互いに先生になったつもりでわざと厳しいことを言い合う中で、表現したいことが形になってきました。

就職セミナーで「建築を専門に学ばなくても設計は可能」という会社があることを知りました。ユニット化され、スピードや取扱数を重視する設計ならば、誰でもできると聞きショックを受けました。…ならば「意志を持った設計者になりたい」と思いました。

視点を変えてまちづくりも含めた「都市計画」にチャレンジしよう、千葉大学大学院に進学しました。大学院修了後就職したのは、駅周りの開発に力を入れている会社です。私はずっと商業設計本部という部署で、駅ビル・事務所を作っています。10年がかりの大仕事も多いですが、自分の目が行き届く規模の仕事も大切にしています。

大学で「考え抜く」力をつけました。考え抜き、話し合い、また別の角度から指摘を受け、時には否定される中でまた考える。そうして自分の芯を作っていく。後輩の皆さんにはぜひ、学生という立場を使って、いろいろなことに挑戦してもらいたいです。



塩野敬子

原点はボストン留学での出会い 未来と人をつなぐ科学コミュニケーター

国際学部英語コミュニケーション学科2013年卒業
英国レスター大学大学院で博物館学を学び、2015年秋に文学修士を取得
日本科学未来館事業部 展示企画開発課 科学コミュニケーター

英語コミュニケーション学科1年生後期から、1年半の長期留学プログラムに参加しました。この昭和ボストンへの留学が、その後の私の人生を決めることになるとは、想像もしていませんでした。課外活動が奨励されていて、市内にあるボストン・チルドレンズ・ミュージアムという子ども向け博物館のボランティアを紹介されました。子どもは物言いがストレートだから怖くて、最初は断ろうとしたのです。でも、コーディネーターに「行ってみてダメならまた考えればいいから」と背中を押されました。行ってみると京都の町屋が再現されていて、「日本語なまりは、それ自身が文化だから気にしないで」と言われました。来館者が展示品に触れるハンズオン展示も新鮮でした。それまで博物館のことは全く知らなかったのですが、「文化を伝える」という、来館者とのコミュニケーションに魅せられました。卒業後は京都の非営利団体で働きながら、遠隔で英国レスター大学大学院の博物館学を2年間受講して文学



眞木まどか

修士を取得しました。この学びを生かしたくて、日本科学未来館で科学コミュニケーターを務めています。科学未来館は科学技術を文化として捉え、どう社会に役立てられるかを考える場を目指しています。来館者は3割が海外から。科学コミュニケーターは、科学者と市民の架け橋です。最先端の科学技術を見せるだけでなく、お客さまと直接話したりワークショップをしたり、科学が生活にどのような影響を与えるのか、話し合いたい。生涯に渡って学ぶことを楽しめる博物館に、携わり続けていきたいです。